

はじめに

令和4年8月下旬、「朝日桜の会」で機会をいただき、かつて各国駐在の日本大使館に依頼するなどして収集し、教材として活用していた各国紙幣を素材に拙いお話をさせていただいた。

決済のキャッシュレス化が急速に進んでいる現状であるが、紙幣等を全く使用しないという時代は少なくとも日本ではもう少し先のように思える。時代を越え、長年使用されてきた紙幣は注意深く観察し、調べてみると興味深いことがいろいろと分かってくる。

例えば、我が国では、本校創立の年とされる1874（明治7）年から遡ること3年前の1871年、「新貨条例」の制定に伴い、通貨単位としての「圓（円、YEN）」が初めて登場した。当時は、戊辰戦争の戦費および殖産興業の資金として不換紙幣である太政官札が多量に発行されるとともに、民部省、廃藩置県前の新政府直轄の府・県、あるいは為替会社が、それぞれ紙幣（民部省札など）を発行していたため、混乱を極めていた。政府は、これら不換紙幣の交換と統合、廃藩置県の実質的な効果を狙って、1872（明治5）年に大蔵省が大蔵卿の名において「明治通宝」を発行したのだが、当時の日本には偽造防止の高度な印刷技術はなく、印刷は先進国ドイツの商社に発注しなければならなかった。

1873（明治6）年には、国立銀行条例に基づいて第一国立銀行（のちの第一勧業銀行、現在のみずほ銀行）が設立されたが、国立銀行が発行した「旧国立銀行券」には、素戔鳴尊が「八頭大蛇退治」の場面で登場し、神功皇后の「征韓の図」が描かれた。この紙幣は、アメリカの紙幣のデザインに強い影響を受けており、印刷も同国の印刷会社に発注された。その後は日本で製造が本格化した。しばらくはイタリア人エドワード・キヨッソーネなどのお雇い外国人の技術的支援を必要とした。

紙幣の図柄に着目すると、天皇を頂点とする国家体制を反映して日本神話に登場する人物や、忠君愛国を体現したとされる歴史上の人物を数多く登場させたが、1882（明治15）年の日本銀行条例公布により銀行券の発行が日銀独占のもの（日本銀行券）となり、兌換銀行券が発行されるようになって、この傾向は変わらず、1887（明治20）年9月の閣議では、日銀券に登場する人物を、日本武尊、武内宿禰、藤原鎌足、聖徳太子、和氣清麻呂、坂上田村麻呂、菅原道真の7人に決定、彼らはゆかりの深い神社や寺院とともに紙幣に採用され続けた。

戦後、この傾向は一変した。GHQにより「お札の人物バージ」が行われたからである。軍国主義的な人物とされずに「生き残った」のは聖徳太子だけで、代わって登場したのが二宮尊徳、板垣退助、岩倉具視ら平和、自由、民主主義を



中央「拾圓」の右に兌換の文言が見られる「和氣清麻呂」 右上隅には証紙

象徴する人物であった。そして現代では、欧米諸国と同様の傾向で、文化人、国際人が取り上げられて、福沢諭吉、新渡戸稲造らが登場、2024（令和6）年、本校150周年の際には、渋沢栄一、津田梅子、北里柴三郎が紙幣の顔になっているはずである。

我が国の例のように、各国の紙幣は、その国の歴史や文化、技術水準、政治や社会の状況等の様相を示すものとなっている。ここでは、朝日桜の会でお話した内容を含めて、各国の紙幣とそれに纏わる歴史等について若干の紹介をさせていただく。

1 戦時ハイパーインフレーションの証人

昨年2月、ロシアのウクライナへの軍事侵攻が始まり、この本稿執筆中の段階では未だ出口が見えず、安全への不安だけでなく、グローバル化された世界でのエネルギー資源不足、急激な物価高騰、為替レートの大幅変動、さらなる戦禍拡大等とその影響は広がりを見せている。

歴史上、戦時には、同様の物価高騰、あるいはさらに酷い、第一次世界大戦後のドイツで見られたようなハイパーインフレーションさえ発生する。



下から上へ50億、500億、5000億ディナール
毎週の紙幣変更により、すべて番号が「AA」で始まっている(各券右下)

戦が始まった。91年11月にマケドニアが、さらに92年3月にボスニア・ヘルツェゴビナが独立を宣言した。当時、ボスニア居住の約430万人のうち44%がムスリム人、33%がセルビア人、17%がクロアチア人であり、ムスリム人とクロアチア人が独立を推進したのに対し、連邦からの離脱にセ

ここに示すのは、この度のウクライナ侵攻までは、第二次世界大戦後のヨーロッパで最悪の紛争と言われてきた1992年発生 of ボスニア・ヘルツェゴビナ内戦に関与した新ユーゴで発生した、驚異的なハイパーインフレーション発生時の紙幣である。

もともと旧ユーゴスラビアは1945年に多民族を6共和国にまとめて成立した国であった。その団結は、成立時にドイツ軍と戦い、国土を解放した偉大な指導者ティトーがいたこと、独自の共産主義路線を行く中でソ連侵攻への恐怖心とが民族、宗教の違いを乗り越えて団結する力となっていた。しかし、80年にティトーが亡くなり、ソ連の改革で冷戦が終わったことで、「分裂は時間の問題」と言われていたことが現実のものとなっていったのである。

まず、91年6月にスロベニアとクロアチアが独立を宣言し、セルビア人を主体とするユーゴ連邦軍が両国を攻撃し、内

ルビア人の多くが反対し、両者間の対立が翌4月の軍事衝突に発展した。同月、セルビアとモンテネグロが新ユーゴスラヴィアの成立を宣言し、紛争に武力介入して戦いが激化したため、5月に国連がボスニア紛争の責任を問い、経済制裁を決議した。

内戦時の膨大な公的支出に加えて、武器だけでなく、生活必需品や医療品など一部を除く禁輸措置が発動されたため、物資は底をつき、悲惨な経済状況は戦場のボスニアだけでなく、新ユーゴに波及し、おそろべきハイパーインフレが発生したのである。そのインフレ率は、93年8月の月間で1900%、その後もとどまるところを知らず、12月11日に50億ディナール紙幣が出された後、わずか12日後に出されたのが、5000億ディナールである。これでも当時のレートでは約1200円程度にしかならず、牛乳1リットルが約100億ディナールで、店の中には「紙切れ」が溢れた。この間のインフレ年率は6000兆%と言われている。

ボスニア内戦はようやく95年11月に終結するが、この紙幣は、戦時のハイパーインフレという事態を物語る証人であると言えよう。ちなみに旧ユーゴスラヴィアの発行していた人民銀行券には、多民族国家を象徴するように国名、額面、銀行名等が複数の民族語で表記されていたが、その崩壊後、新たに独立した国々が発行し始めた紙幣は単一民族語の表記となっていることは、当然のこととはいえ、注目される。

2 アメリカ独立への思い

アメリカの紙幣のうち最も簡単に手に入るのは何といても1ドル紙幣なのだが、意外にもこれをじっくり観察すると、独立に関連したものがいろいろと見えてくる。

まず、紙幣の表は言わずと知れた初代大統領ワシントンの顔である。肖像の左側にはアルファベットが確認できるが、これは正式名称を「連邦準備銀行」という発券銀行12のうちのどこが発行したかを示すものである。名前は公的銀行に思えるが、これらは民間の銀行が出資し合って創設したものであり、AからLまで、アルファベット順に、Aがボストン、Bはニューヨーク、以下フィラデルフィア、クリーブランド等が続き、最後のLがサンフランシスコを示している。

中央銀行をつくらうという計画があったときに、州側が中央銀行に管理されるのを嫌って反対し、民間銀行がそれぞれの州で、あるいはいくつかの州でまとまって、発券銀行をつくったのであり、このような点でも、United States における連邦主義と反連邦主義のせめぎ合いが感じられる。



表面: ワシントン肖像の左の丸に囲まれた「B」



裏面: 「13」に溢れるデザイン

1ドル紙幣の裏側を見たことがある人は少ないのではないだろうか。まず中央に「IN GOD WE TRUST」（我々は神を信仰する）という現在のアメリカの標語が英語で書かれている。大きな「ONE」

の左右に描かれているのはアメリカの国章（The Great Seal）で、右側がその表、左側が裏である。右側の白頭鷲は、右足に平和を表すオリーブの葉と実、左足に戦いを表す矢を握りしめており、その胸には縦縞、上部には星が描かれている。そして、これらの数はいずれも「13」である。鷲はテープのようなものをくわえているが、そこにはラテン語で 'E PLURIBUS UNUM'（多から一つ、多数の統一）という1955年までのアメリカの標語が書かれている。多州から成り立つ国家 'The United States' が暗示されていることが容易に想像される。

左側には、さらに13段の階段をもつ不完全なピラミッドが描かれ、一番下の土台部分にはローマ数字で 'MDCCLXXVI' とあるが、これが独立宣言の年「1776」である。ピラミッドの上からは、全知全能の神の「目」が、'ANNUIT COEPTIS'（神は我々の企てを祝福す）のラテン語とともに見つめ、この図柄の下部もラテン語の 'NOVUS ORDO SECLORUM'（時代の新しい秩序）で締めくくっているが、この二つはヴェルギリウスの叙事詩「アエネイス」からの引用である。

こうして見ると、単なる1ドル紙幣であるが、アメリカ合衆国の人々の「独立」に対する思い入れを想像できる教材になる。少なくともここでは 'DEVIL'S DOZEN'（悪魔の1ダース）といわれる「13の迷信」より、独立を達成した「13植民地」が重視されているのである。

3 太陽の沈まぬ大英帝国

昨年9月、70年間にわたって君臨したエリザベス2世が亡くなり、イギリス国民や各国首脳らの哀悼をニュースで連日視聴したところだが、女王の逝去によって、イギリスだけでなく、「イギリス連邦（Commonwealth of Nations、コモンウェルス）」でも様々な変化が起きる可能性が報じられている。イギリス連邦は、オーストラリアなど旧イギリス植民地のうち、その後独立した国、あるいは



左上：ニュージーランド旧20ドル 右上：オーストラリア現行5ドル
 中央：イギリス現行10ポンド
 左下：バハマ旧50セント 右下：ベリーズ旧1ドル

その属領とが連合し、イギリス国王をその象徴として認め、相互援助と協力を図るゆるやかな結合体といった、定義の難しい国際組織で、加盟国（現在は56カ国）はイギリス連邦の一員として英王室との関係を維持してきた。このうち15カ国は、現在もイギリス国王を君主とする「イギリス連邦王国（Commonwealth realm、コモンウェルス・レルム）」である。

したがって、現在のイギリス連邦加盟国の紙幣からは、かつての「太陽の沈まぬ大英帝国」の名残を感じることができる。エリザベス女王の肖像は、国によりその年齢や描き方から評

判まで様々あるようだが、紙幣で採用しているのは、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、ペリーズなど35カ国にも及んでいる。

通常であれば、これらは女王の逝去を受けてイギリス本国と同様にデザインを変更することになるはずであるが、1935年にエリザベス女王の肖像を最初に採用したカナダを含め、70年続いた女王の統治が終ったことをきっかけに、今後はイギリスとの関係を巡って大きく動き出す国が出てくる可能性も指摘されている。そうすると、ここに紹介した紙幣も将来的には一つのセットとして価値あるものになるかもしれない。

4 マハトマ(大聖)と多言語国家インド

2023年、ついに中国を上回り人口世界一になることが予想されているインドだが、現在流通しているインド紙幣の図柄は、「マハトマ・ガンディー」シリーズと呼ばれ、現在発行されている8種すべてでガンディーの肖像が載せられている。インド独立の「国父」が今なお偉大な存在で、国民に敬愛されていることがわかる。



表面: マハトマを挟み、左にアショカ王石柱(柱頭)、右に多言語表示



裏面: マハトマを先頭「塩の行進」

言われており、憲法で公用語として定められているものだけで22ある。このため、現在発行されている紙幣では、表面にヒンディー語と英語、裏面にアッサム語、ベンガル語、カシミール語、パンジャブ語、サンスクリット語等、合計17言語での記載がある。

なお、こうした言語上の配慮は、インドほどではないもののマレーシアやスイスなどの他の多言語国家でも見られる。

ここに示しているのは、旧紙幣の500ルピーで、裏面の絵は「塩の行進」を描いたものである。「塩の行進」(Salt March/Dandi Satyagraha)とは、1930年にガンディーと彼の支持者がイギリス植民地政府による塩の専売に反対し、製塩の為にグジャラート州アフマダーバードから同州南部ダーンディー海岸までの約380kmを行進した抗議行動のことで、行進は3月12日から4月6日まで続き、インドのイギリスからの独立運動における重要な転換点となったものである。

インドは大変な多言語国家であり、一番よく使われているのがヒンディー語であるが、まったく通じない地域が無数にある。また、準公用語は英語であるが、日常的に英語を話せる人は14億を超える人口の約1割と

おわりに

以上、世界各国の紙幣に関連した世界史について若干述べてさせていただきました。

文章は誠に稚拙であり、研究の名に値しないが、ここまで述べてきたように世界の紙幣、またこの度は触れなかったが貨幣（コイン）は、各国の社会・経済・文化の歴史あるいは現状を映し出す鏡でもあり、国際理解を進める上で様々な情報を提供してくれる有効な教材でもある。

また、私自身がこうした資料を使用する際には、主に興味を深めるため、授業の導入で口頭説明した後、生徒に実物を回覧していたこともあって、生徒が資料を実際に手に取る時には、すでに授業は展開に入っているという状況となり、タイミングのずれを感じていた。しかし、今後一人一台端末の活用が進む中で、第一には生徒が同時に手元の端末で紙幣等を拡大して観察できるという点で、第二に翻訳ツール等の活用による各国言語の和訳などを通して意味合いや意義等を考察できるという点で、この種の観察が可能な教材と端末は親和性が高いのではないかと考えている。

最後に、このたび考察の機会を与えていただいた先生方、ご協力いただいた先生方に感謝を申し上げます。

主要参考文献

- ・加来耕三『紙幣の日本史』KADOKAWA、2019年
- ・日本貨幣商協同組合『日本貨幣カタログ 2018年版』
- ・宮崎正勝『知っておきたい「お金」の世界史』2009年、角川出版
- ・拙稿「お金が物語る世界史—各国紙幣を活用した世界史授業—」『歴史と地理』483号、山川出版社、1995年
- ・拙稿「国際理解教育のために」『社会科教育』第31号、岡山県高等学校教育研究会社会部会、1994年
- ・富田昌宏『紙幣が語る戦後世界』中央公論社、1994年
- ・植村峻『お札の文化史』NTT出版、1994年
- ・三上隆三『円の社会史』中公新書、1989年
- ・田中哲二『お金の履歴書』東洋経済新報社、1984年